

深さと距離を与えること

神社やお寺は近代以前から多くの参拝者、観光客が集まり、広く人々にとって特別な場であり続けてきた都市のコアである。橋を渡り、曲道を抜け、灯籠の間を通る…参道を歩いていくうちに、コアをコアたらしめるようなある種の仕掛けがちりばめられているように感じた。社寺の参道空間を都市のコアに深くかかわるアプローチ空間としてアーカイブした。具体的には、鳥居や橋など、参道に点在する境界装置の分析、参道の平面形態の分析、シークエンス分析を行い、そこから得られた「かた」を用いて設計をする。

アプローチ空間としての道を作り、その先の空間に深さと距離を与えることで魅力的な場をうみだす、という建築のはたらきの一つに注目して現在不足している京大建築学の博物館機能および外部研究者のための宿泊施設、学生、教職のためのレストラン及びその先の思索のための場を設計した。

2024年 柳沢研スタジオ課題

制作：小池駿輝 水崎恒志



1. 「都市のコア」のアーカイブ

1.1 アーカイブ対象の設定：社寺とその参道

近世以前から存在し、広く人々にとって特別な場であり続けてきた。
現在でも多くの観光客が訪れ、行事の中心地となる都市のコアである。

参道を歩いていくうちに、少しづつコアに近づく高揚感が高まっていく。
橋を渡り、曲道を抜け、灯籠の間を通る...コアをコアたらしめる、ある種の「きっかけ」が散りばめられているように感じた。

社寺というコア、その空間性質を明らかに周囲と異なるモノにしながら、かつ周囲からコアへの動線をつなぎ、その過程で社寺をコアとして引き立たせるような演出機能を持つ。
参道アプローチどのような空間要素がこうした機能を生んでいるのか、社寺というコアの持つ聖性にもある程度留意しながら、参道を歩く歩行者の視点を意識してその空間構成をアーカイブする。

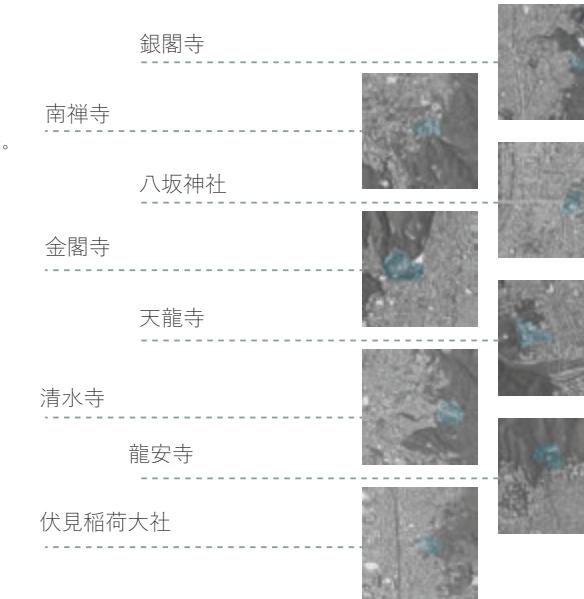
1.2 アーカイブ対象の絞り込み

社寺の中でも特に都市のコアとして機能し、前項のアプローチ 結果として、次の8か所の社寺を選定した。

空間を持つと思われるものをアーカイブするため、

以下を調査対象の条件とした。

- ・全国知名度
- ・室町時代以前に建立
- ・訪問客数
- ・周囲が市街化
- ・周辺へ影響
- ・京都市内



1.3 アーカイブ

今回、参道の空間構成を知るため、3つの視点からアーカイブを行った。

1. 参道に点在する境界装置の分析
2. 地図上での参道の平面形態の分析
3. 参道空間のシーケンス分析

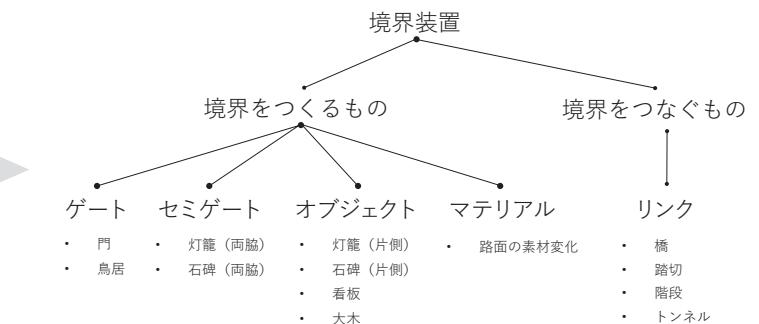
1. 参道に点在する境界装置の分析

参道のアプローチ空間の空間要素のうち、点的で、不連続な変化を与えるもの、すなわちコアへの切り替わりを演出するものを「境界装置」とする。

<分析>

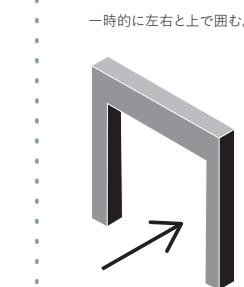
装置を集める。

- | | |
|-----|---------|
| ・門 | 路面の素材変化 |
| ・鳥居 | 化 |
| ・灯籠 | 橋 |
| ・石碑 | 踏切 |
| ・看板 | 階段 |
| ・大木 | トンネル |

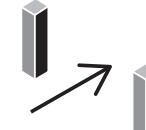


かた

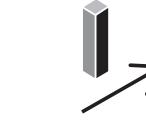
ゲート



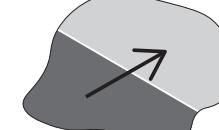
セミゲート



オブジェクト



マテリアル



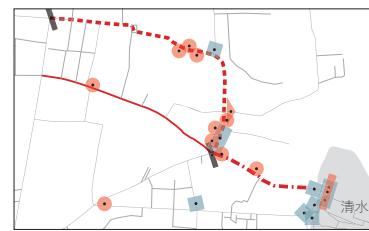
リンク



2. 参道の平面形態の分析

凡例

- 古くからの参道（周囲と同じ素材）
- 古くからの参道（変化後の素材①）
- 古くからの参道（変化後の素材②）
- その他道路
- 境界装置（ゲート）
- 境界装置（セミゲート）
- 境界装置（オブジェクト）
- 境界装置（マテリアル）
- 境界装置（リンク）
- 対象地の境内



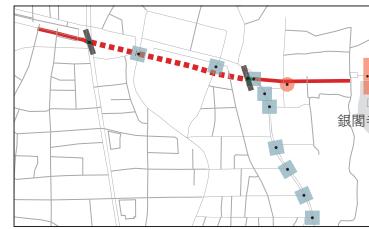
清水寺1:7500

古くからの参道と境内入口付
近に境界装置が分布。新しく
できた参道にも分布している。



天龍寺1:7500

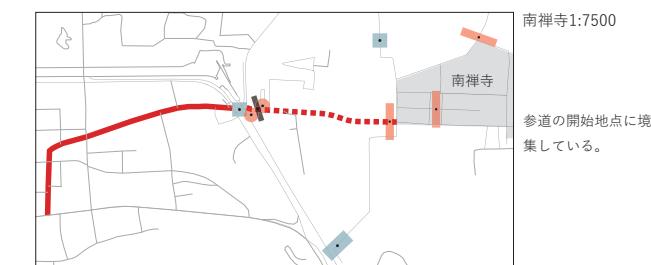
境界装置は入口付近に密集して
いる。南側の渡月橋へ向かう道を中
心に発展している。



銀閣寺1:7500

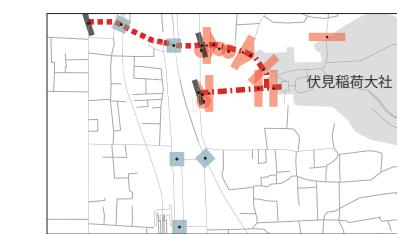
橋が多く分布しており、昔
から残っている参道は橋を
わたってからの道である。

2.



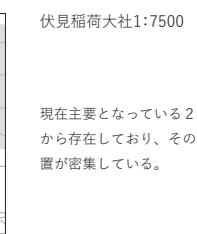
金閣寺1:7500

境内の門に対してまっすぐ参道
が形成されている。



南禅寺1:7500

参道の開始地点に境界装置が密
集している。



伏見稻荷大社1:7500

現在主要となっている2本の参道は昔
から存在しており、その参道に境界装
置が密集している。



八坂神社1:7500

本殿は南を向いており、正門
は南の門だが、西の四条通り
のほうが、商店街化して栄え
ている。

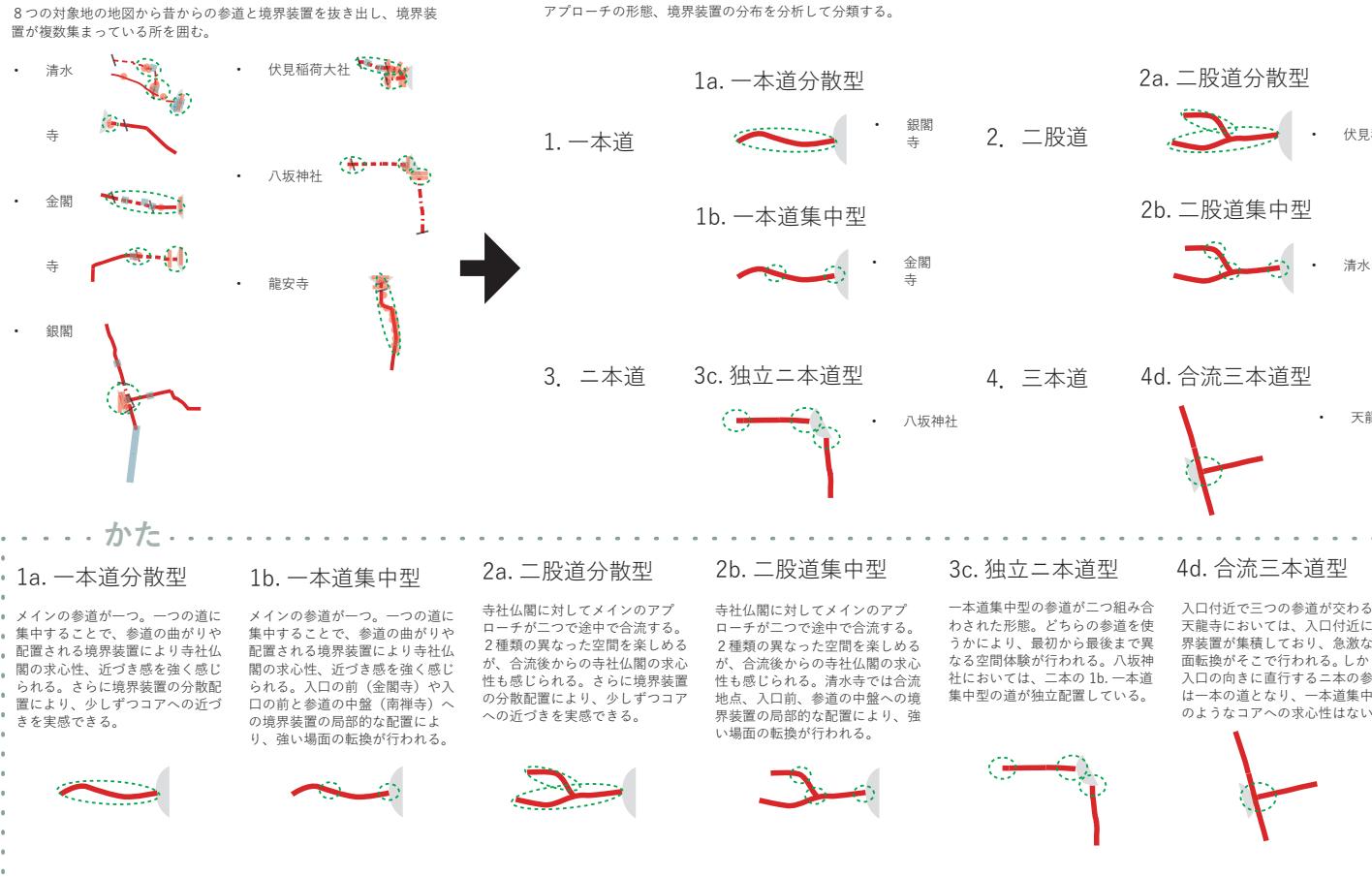


龍安寺1:7500

昔からある参道に沿って境界装置が分
布している。境内入口の門を横切る道
は遊歩道化されているが比較的新しい
ものである。

2.

地図上の分析より昔からの参道について、着色してアーカイブを行った。そこから、寺社仏閣への近づき感、その実感を与えるためのアプローチの構成を分析する。



かた

1a. 一本道分散型	1b. 一本道集中型	2a. 二股道分散型	2b. 二股道集中型	3c. 独立二本道型	4d. 合流三本道型
メインの参道が一つ。一つの道に集中することで、参道の曲がりや配置されることで、参道の曲がりや配置される境界装置により寺社仏閣の求心性、近づき感を強く感じられる。さらに境界装置の分散配置により、少しずつコアへの近づきを感じる。	メインの参道が一つ。一つの道に集中することで、参道の曲がりや配置される境界装置により寺社仏閣の求心性、近づき感を強く感じられる。さらに境界装置の分散配置により、少しずつコアへの近づきを感じる。	寺社仏閣に対してメインのアプローチが二つで途中で合流する。2種類の異なる空間を楽しめるが、合流後からの寺社仏閣の求心性も感じられる。さらに境界装置の分散配置により、少しずつコアへの近づきを感じる。	寺社仏閣に対してメインのアプローチが二つで途中で合流する。2種類の異なる空間を楽しめるが、合流後からの寺社仏閣の求心性も感じられる。さらに境界装置の分散配置により、少しずつコアへの近づきを感じる。	一本道集中型の参道が二つ組み合わさる形態。どちらの参道を使おうかにより、最初から最後まで異なる空間体験が行われる。八坂神社においては、二つの1b. 一本道集中型の道が独立配置している。	入口付近で三つの参道が交わる。天龍寺においては、入口付近に境界装置が集積しており、急激な場面転換がそこで行われる。しかし、入口の向きに直行する二つの参道は一本の道となり、一本道集中型のようなコアへの求心性はない。

3.

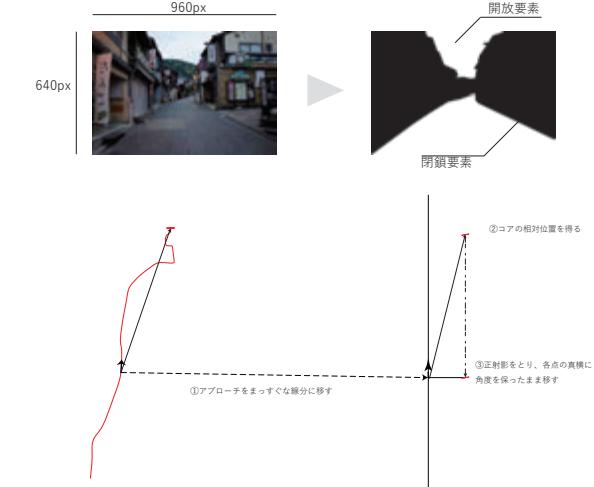
シークエンス分析

1,2のアーカイブでは拾えなかった、参道の持つ線形で連続的な空間性質について、以下の視点でアーカイブ、グラフ化し、その後境界装置の分布と合わせて重ね合わせることで「かた」を得る。

3.

■視界分析

実際に参道を歩く中で、微妙な曲道や道幅変化、通り過ぎる街路樹や建物の面による視界要素の変化、特に開放要素、閉鎖要素の移り変わりが、コアへの誘因性に関わっているように感じた。人間の視野に近い35mmのレンズを用い、参道を大股10歩ごとに進行方向に向けて約1.6mの高さから写真を撮り、その後960*640pxにリサイズする。開放要素(空、道など)と閉鎖要素(建物など)に塗分け、ピクセル数をカウントする。これらのダイアグラムから、参道の視界要素変化のダイナミズムを捉える。



■門等の相対位置変化

特に参道という空間においては、門、鳥居、社殿の位置やそれらが定める方向性と、アプローチとの関係性は空間の性格を記述するうえで重要であると考え。アプローチ上の各点における相対的な門、鳥居、社殿の位置の変化をダイアグラム化した。アプローチを一本のまっすぐな線分と捉えると、各点から見たvirtualな門がその周りを動き回る。その正射影をとることで、進行方向と門が定める軸線の角度の差を保ったまま、各点の真横にvirtualな門を表現する。

実際に視界に現れるものは太線で表現する。

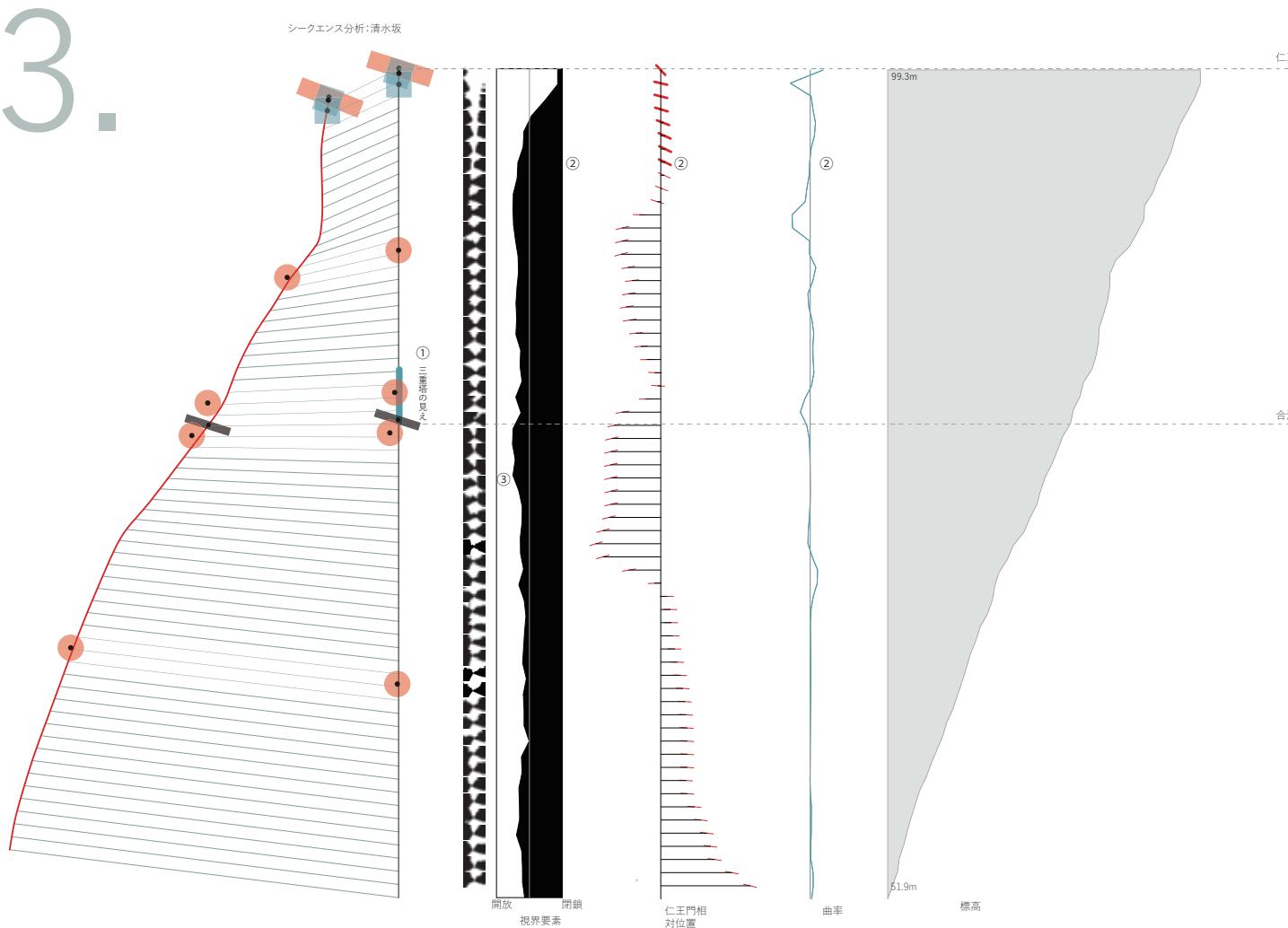
相対位置のダイアグラム化により、門や社殿に対するアプローチの裏、表性、対面の性格を分析する。

■曲率

動線の曲率をグラフ化し、他の線形なダイアグラムと並べることで総合的に分析する。

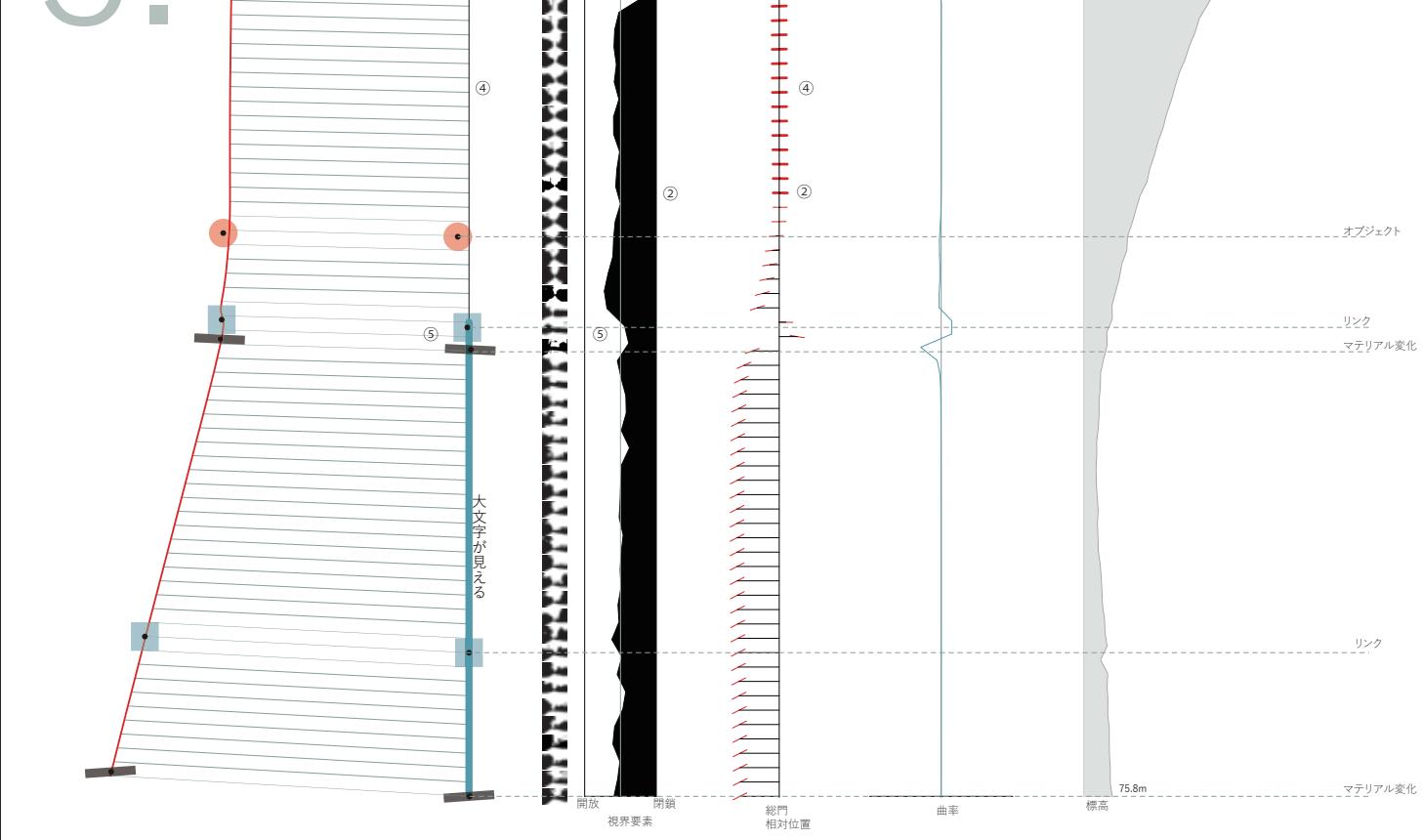
■標高

今回アーカイブ対象としたのはどれも山裾の社寺にあたる。参拝者の感覚に関わるものとして分析する。

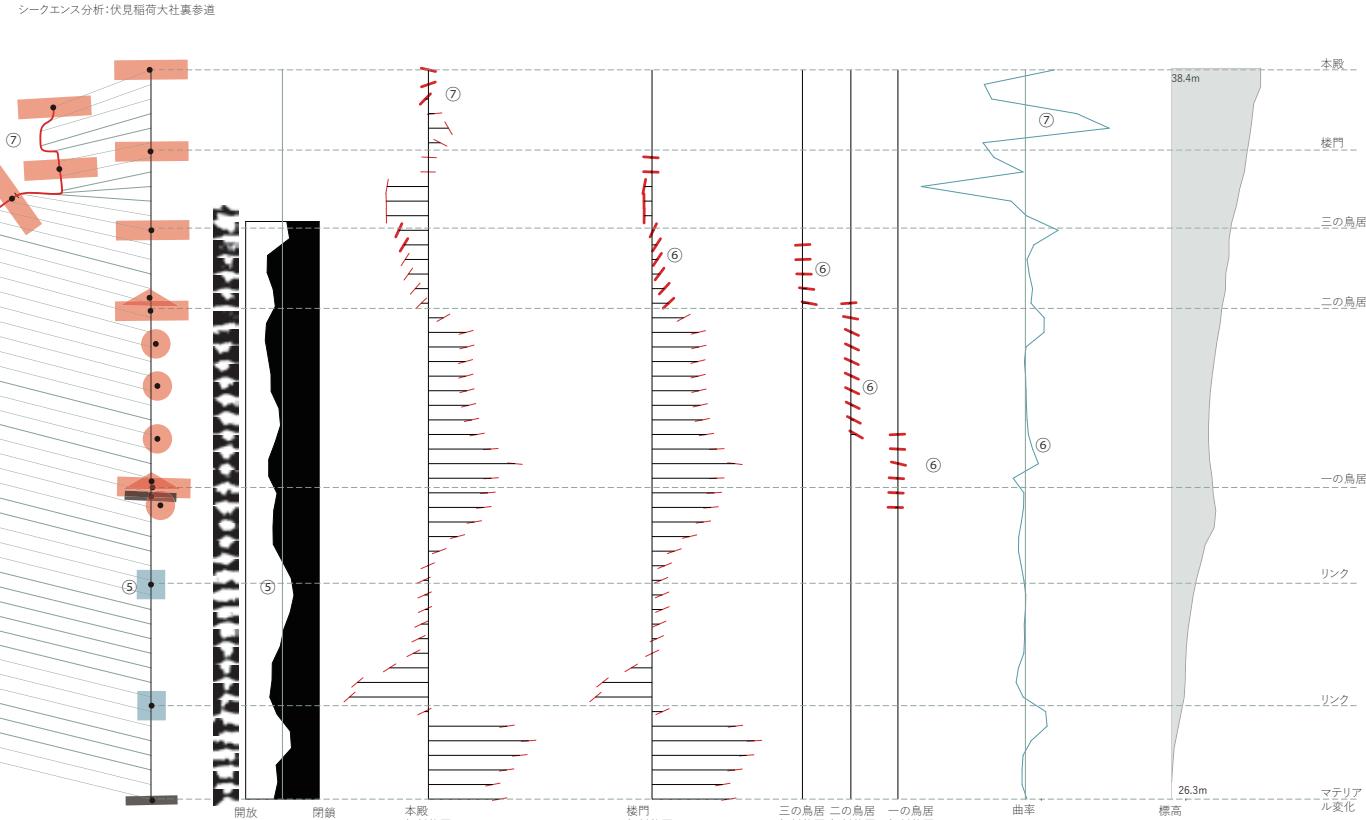


3.

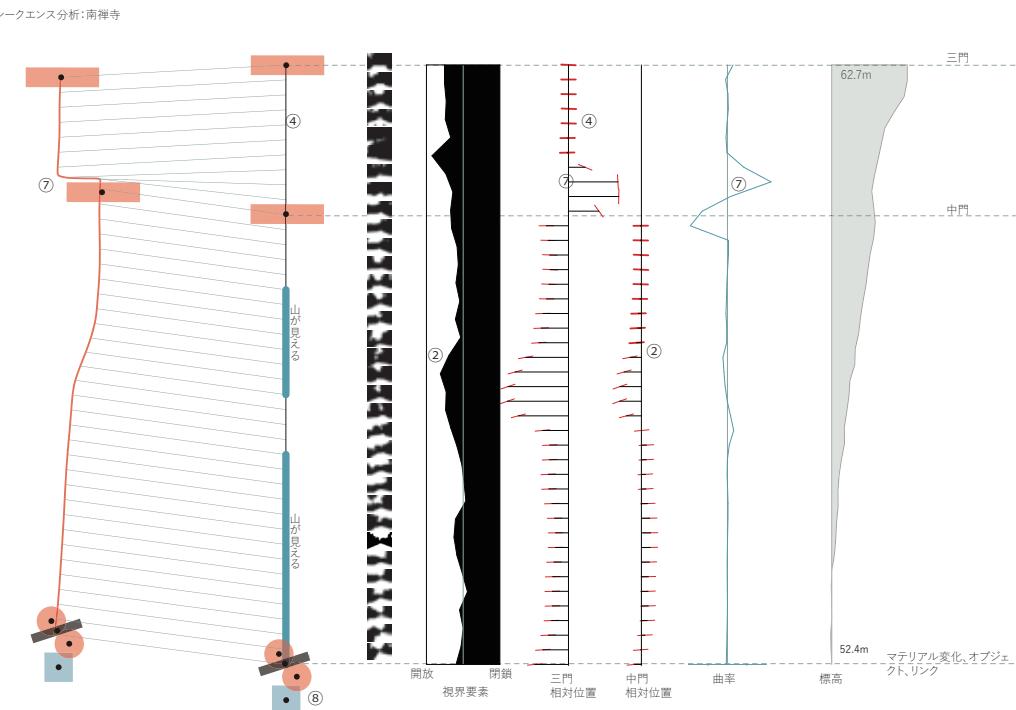
シークエンス分析: 銀閣寺



3.



3.



かた

- ①中間での一時的なコアの見え：連想性
- ②曲道、開放増加と門の見え：期待の高まり
- ③合流前の閉鎖増加：合流地点の演出
- ④正対する門と直線道：コアへの高揚感の高まり
- ⑤リンクと開放増加：強い転換
- ⑥曲がり道と連続したコアの見え：リズムの創出
- ⑦コア前の回り込み：突然性
- ⑧視点の境界装置の集積：エリアのサイン

2. 参道の考察、設計の前段階として

2.1 参道空間の持つ機能、性質

参道にはコアへの近づき感を演出する仕掛けがある、という考え方からスタートし、アーカイブ及びかたの抽出を通して参道空間について以下の性質を考えた。

- ・市街領域からの切り替え
- ・市街領域からのつなぎ
- ・社寺への引き立て
- ・自らの聖性
- ・線形性

「つなぎ」の機能はそもそも道である参道が原理的に持つ性質である。

参道はさらにそこに方向性を持つ。

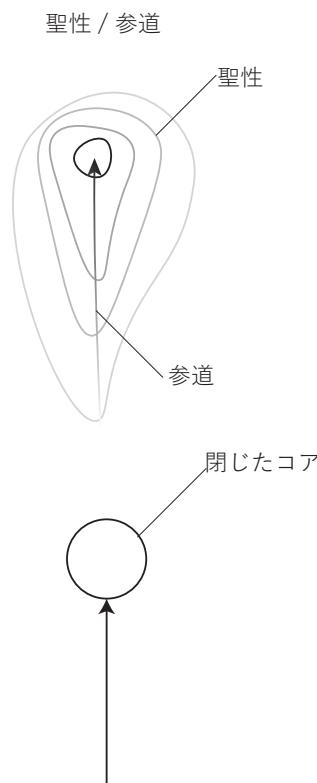
「社寺への引き立て」、「自らの聖性」は、参道が市街から社寺へ「つなぎ」、かつ「向かう」道でありながら、自らはグラデーションに社寺の側に属することを示す。

線形性は、つまり市街領域と社寺とにおける上の性質や機能が、中間領域や緩衝領域のような面的形態でなく道という形態で現れることを示す。

これは社寺、つまりコア側の形態の問題と考える。今回アーカイブ対象とした社寺は山裾に位置し、自然という市街と別の領域で包まれている。

次を参道がつなぐ社寺の性質とする。

- ・市街と別の領域に囲まれ、参道以外には閉じている。



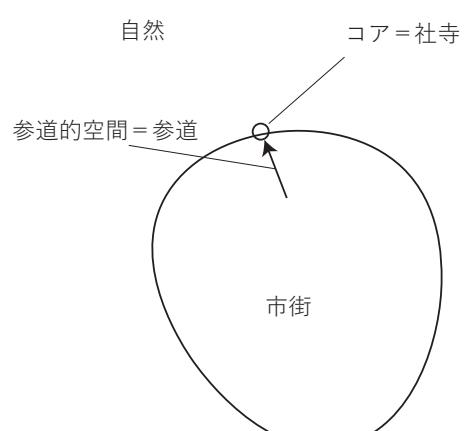
2.2 参道的空間の持つ機能、性質

アーカイブを生かして設計に移るため、参道空間とコアを少し一般化して考える。

- ・周辺領域と別の領域に囲まれ、参道以外に閉じている。
- ・何かしらの場所的な力を持つ。

をコアの持つ性質と読み替え、そこにつながる「参道的空間」の性質として以下を考えた。

- ・異なる領域からの切り替え
- ・異なる領域からのつなぎ
- ・コアへの引き立て
- ・自らコアの場所的な力をもつ
- ・線形性



2.3 参道 - 社寺の形成過程の一つの解釈

参道と社寺の形成過程について、参道的空間という引いた目線からの解釈を試みる。

まず市街という領域があり、周りは自然という別の領域に囲まれる。

自然と市街の境で社寺が、それと市街をつなぐものとして参道が相互作用的に形成され、場所的な力=宗教的聖性を獲得する。

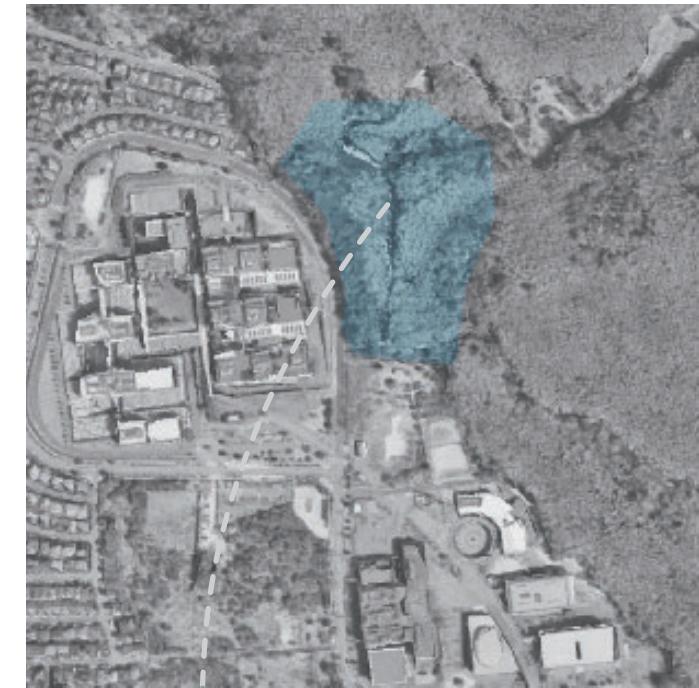
2.4 設計に向けて

考察した参道的空間の性質、機能とコア、周囲環境との相互作用を館合えながら設計する。

3. 設計

3.1 敷地

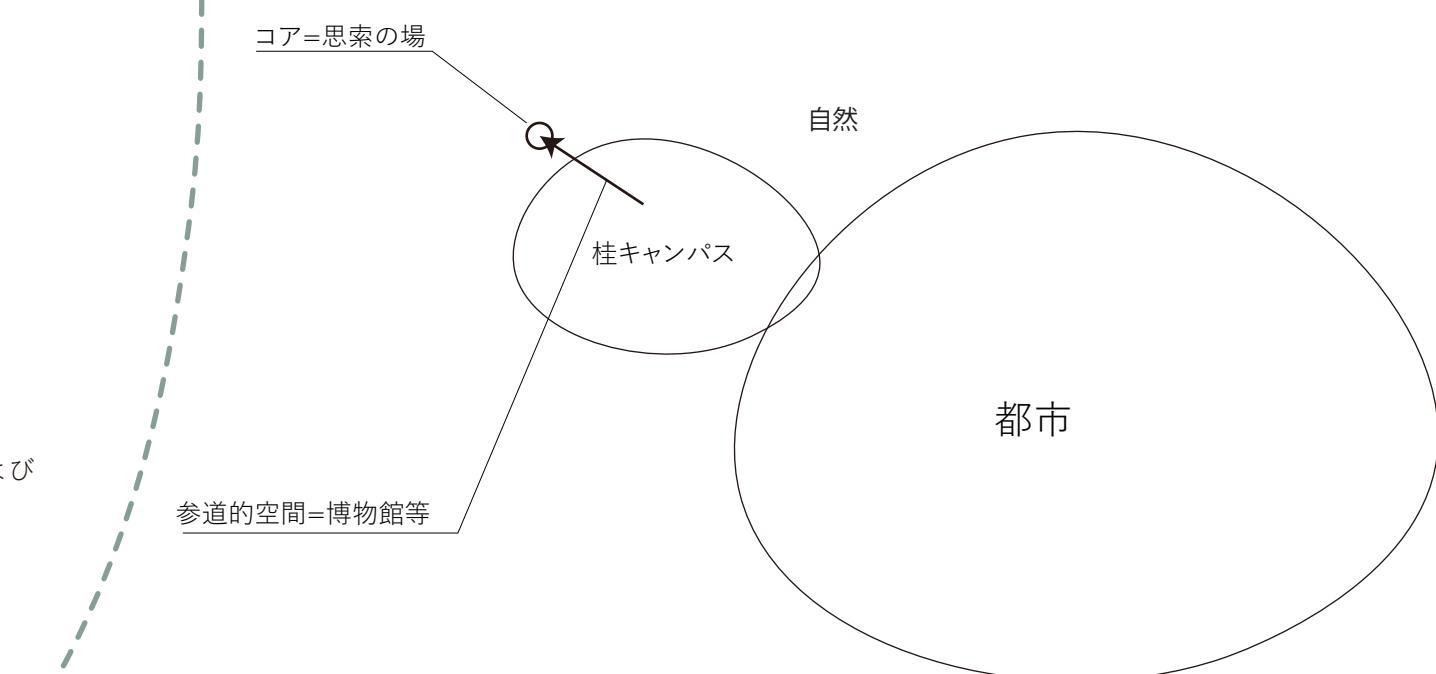
市街という領域から少し離れ、山の上にたつ京都大学桂キャンパス。 御陵公園北の森の中を敷地とする。
一歩立ち入ると背の高い竹や木々に囲まれ、まちへと流れる尾根線、谷線を跨ぐ傾斜地である。



3.2 コンセプト：森の中に考える場所を持つということ

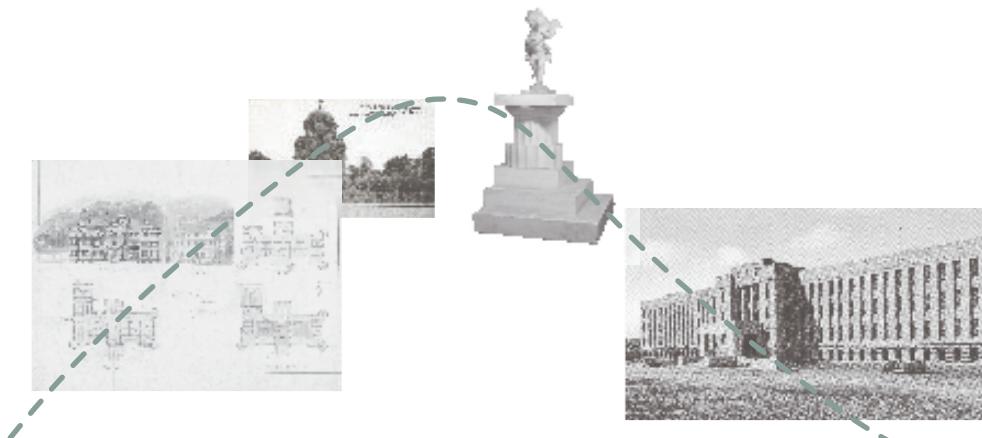
考察において、参道的空间と、それがつなぐコア、そしてそれらの相互作用的な形成を考えた。
京都市一雑多な人々の営みの集積として都市領域があり、それとは異なる秩序でうごく領域として桂キャンパスがある。
自然に囲まれる桂キャンパス、さらにその外縁に、入れ子のようにコアと参道的空间を設計する。
竹林の中ゆえの静かさと、深みに入っていく感覚という場所的な力の獲得を目指す。

研究の合間に、生活の合間に、時間の作用から外れた領域 - 自然に囲まれていく。そこで考え方をしたりする。
自然のなかにコアをもつという学びの場のあり方を提案する。



3.3 プログラム

現在不足している、京都大学建築学の博物館機能および外部からの研究者等のための宿泊施設、学生、教職たちのためのレストランおよび
その先の思索のための空間を設計する。



大学が抱える多くの資料や現在の研究成果を人々に開き、建築学の学びの場を森の中につくりだす。

3.4 動線計画

下のダイアグラムのように、参道空間の平面形態の「かた」を適用することで、複数のプログラムを適した動線でつなぐ。

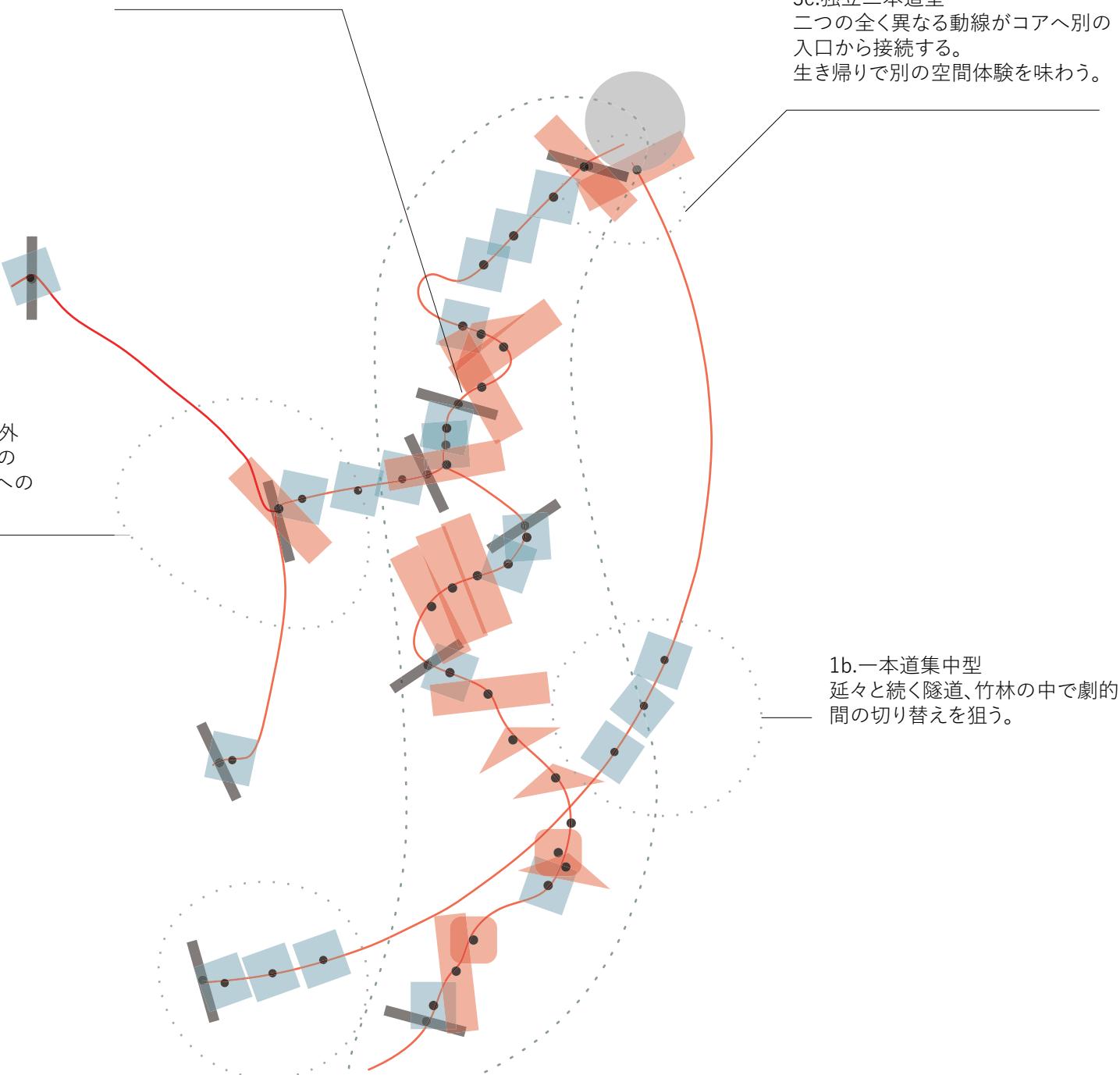
- ①常設展、企画展を通るメイン動線
- ②西側道路に沿うレストラン、宿泊による二股動線
- ③隧道を抜ける緩やかな円弧による一本道及び帰り道

①、②を結ぶ合流地点である屋外広場はサブコアとし、円弧上の曲面壁と斜面に囲まれた休憩、憩いの場としての機能を狙う。

平面形態のかたの適用

1a.一本道分散型

企画展からコアへの道筋を一本に集中させ、境界装置の分散配置により少しづつクライマックスへの期待を高める。



3c.独立二本道型
二つの全く異なる動線がコアへ別の入口から接続する。
生き帰りで別の空間体験を味わう。

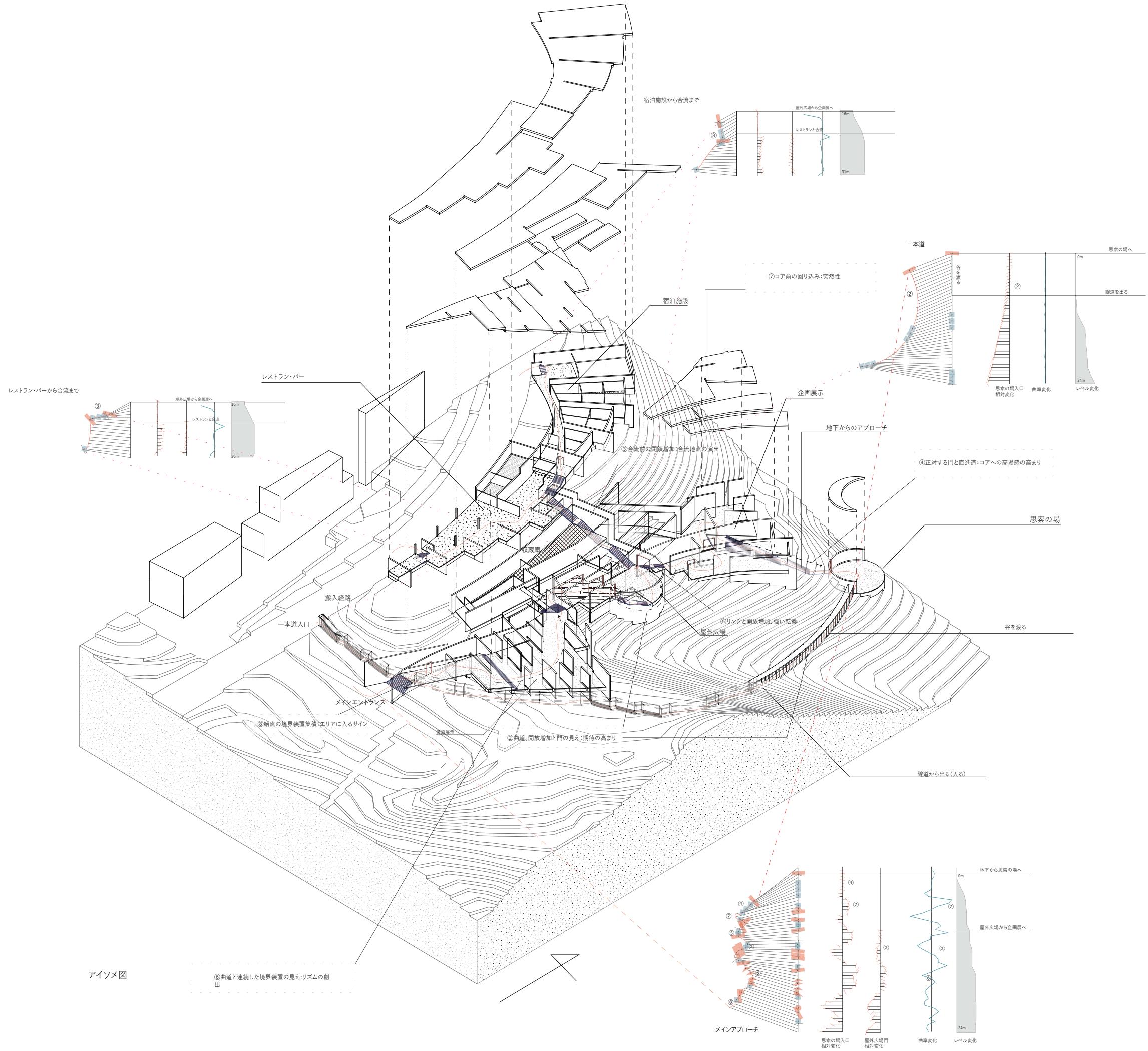
3.5 配置計画

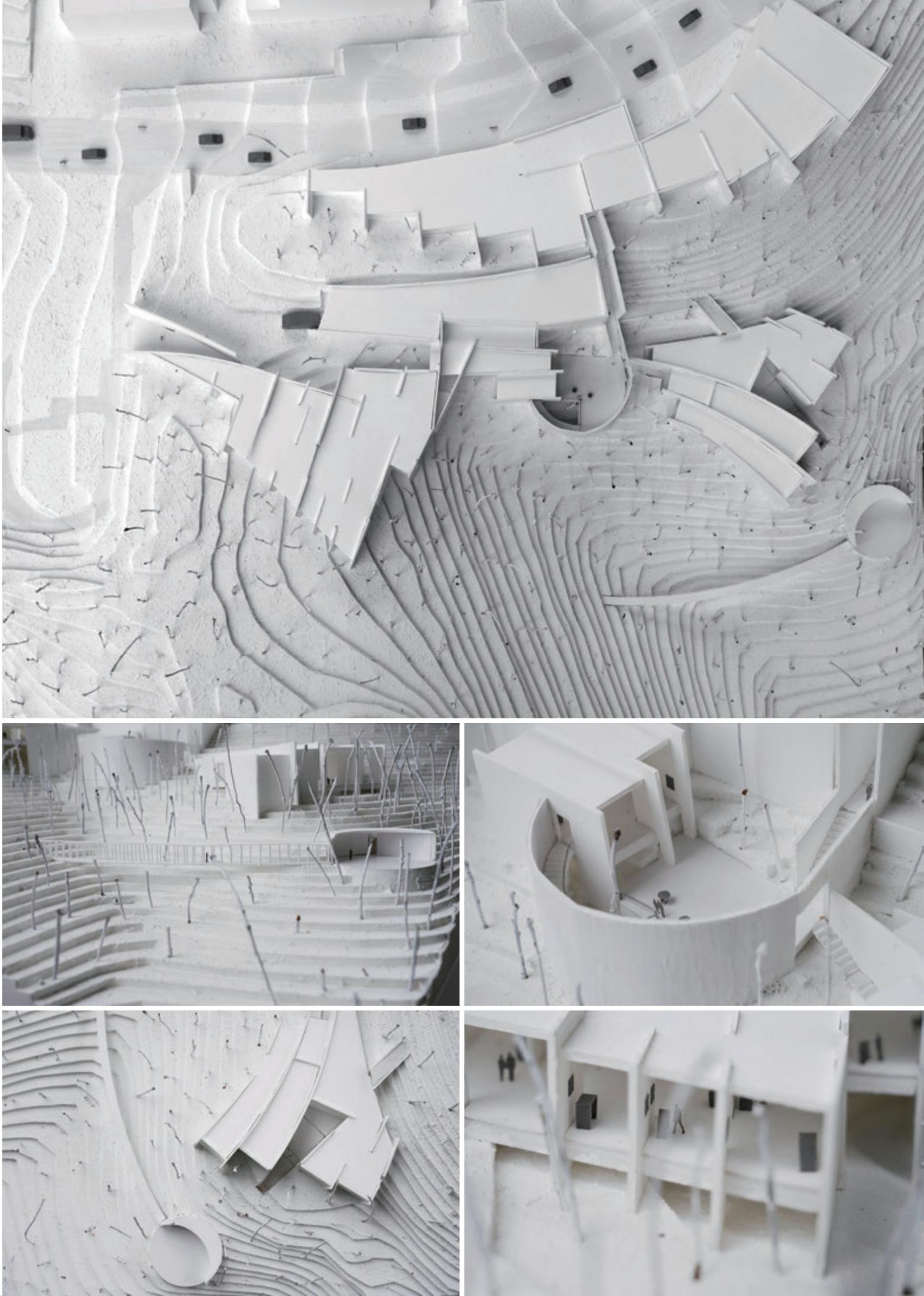
見晴らしを考え、まず尾根線上にコアを配置する。

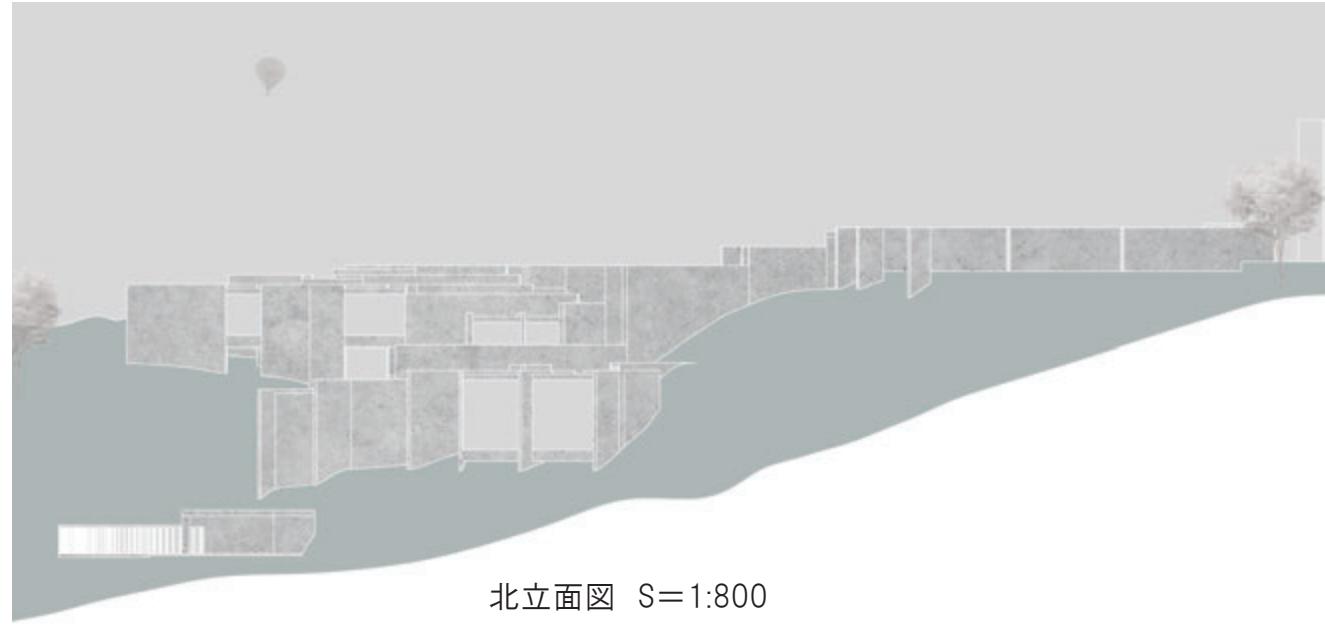
各プログラムは基本的に地形に沿った線を基準に配置し、楽譜上に音符を並べるように、その上に境界装置やシークエンスの「かた」をおいていく。

3.6 主な建築言語

アプローチ空間において動線を制御し、視線を操作するものとして壁を基本的な建築言語とする。 斜面に対して浮く部分では床スラブ、天井スラブ構造的にを支え、展示質では展示壁としても用いられる。

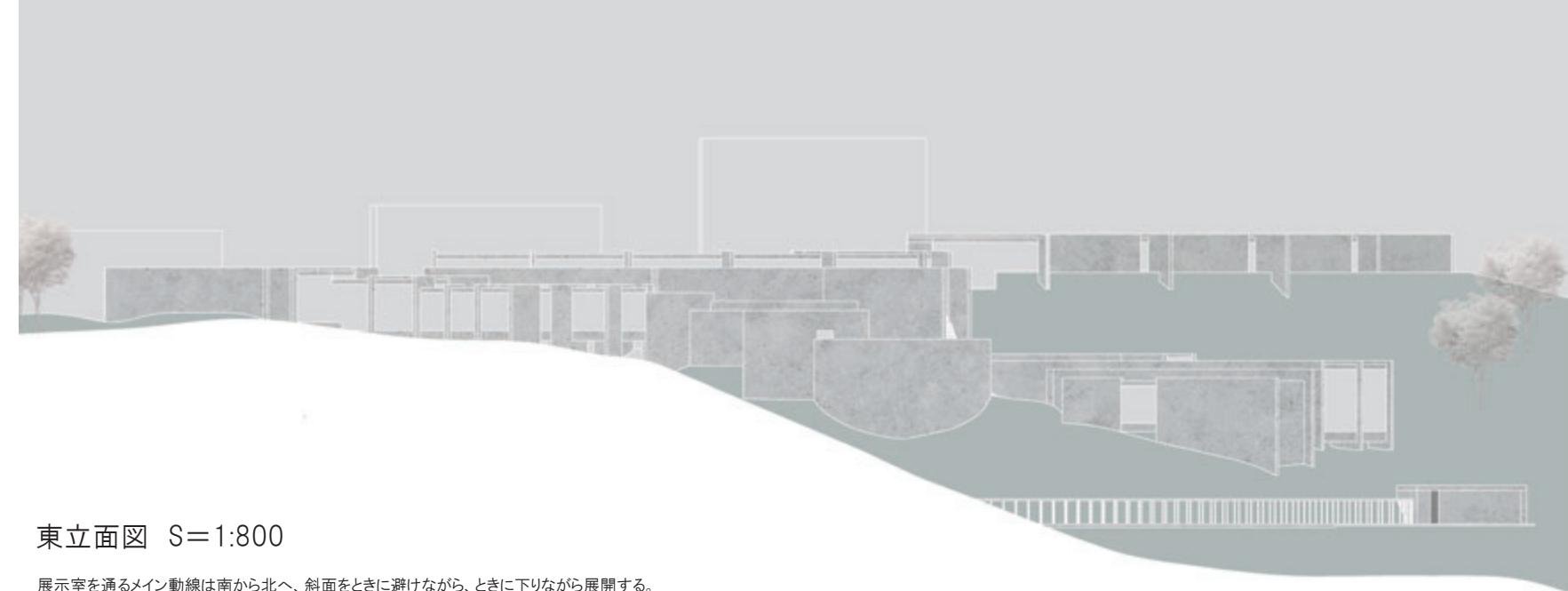






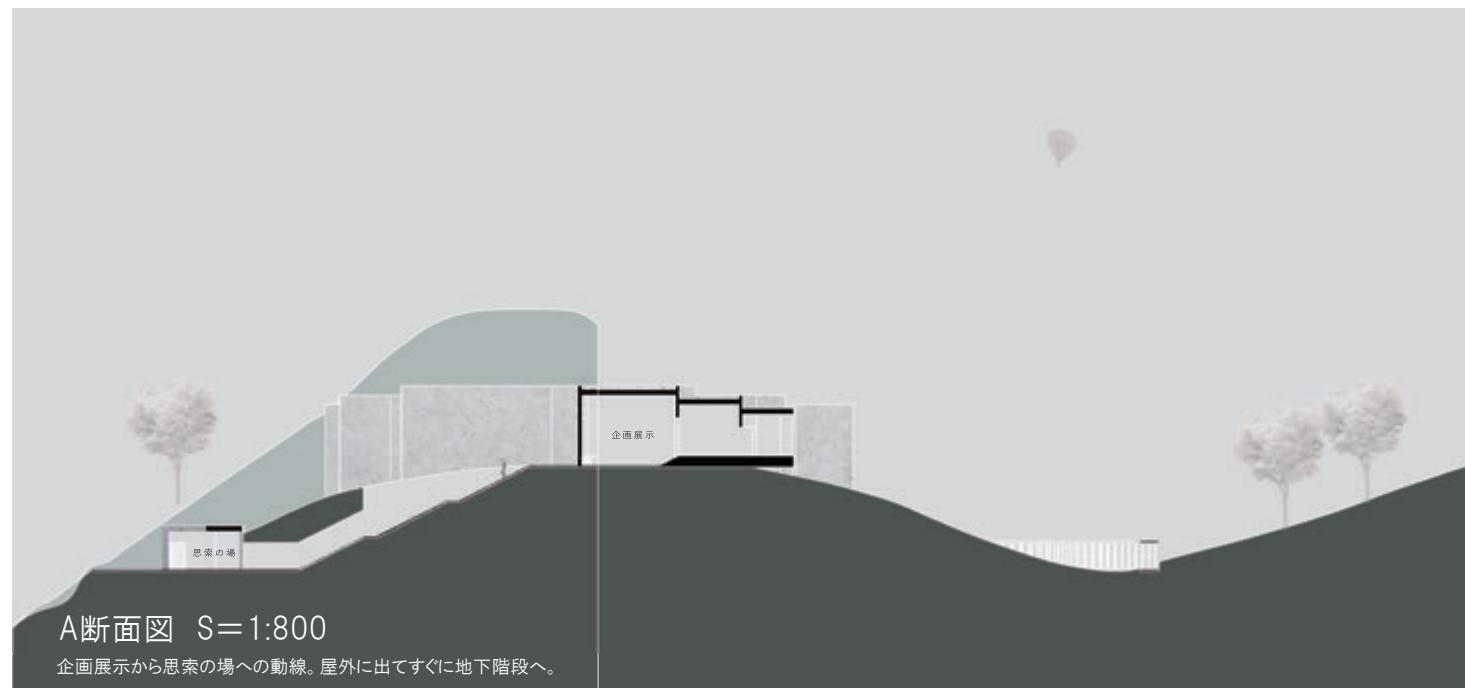
北立面図 S=1:800

宿泊施設、レストランは西側道路沿いに道路レベルで配置。二枚の壁にはさまれた階段を下りて屋外広場へ。



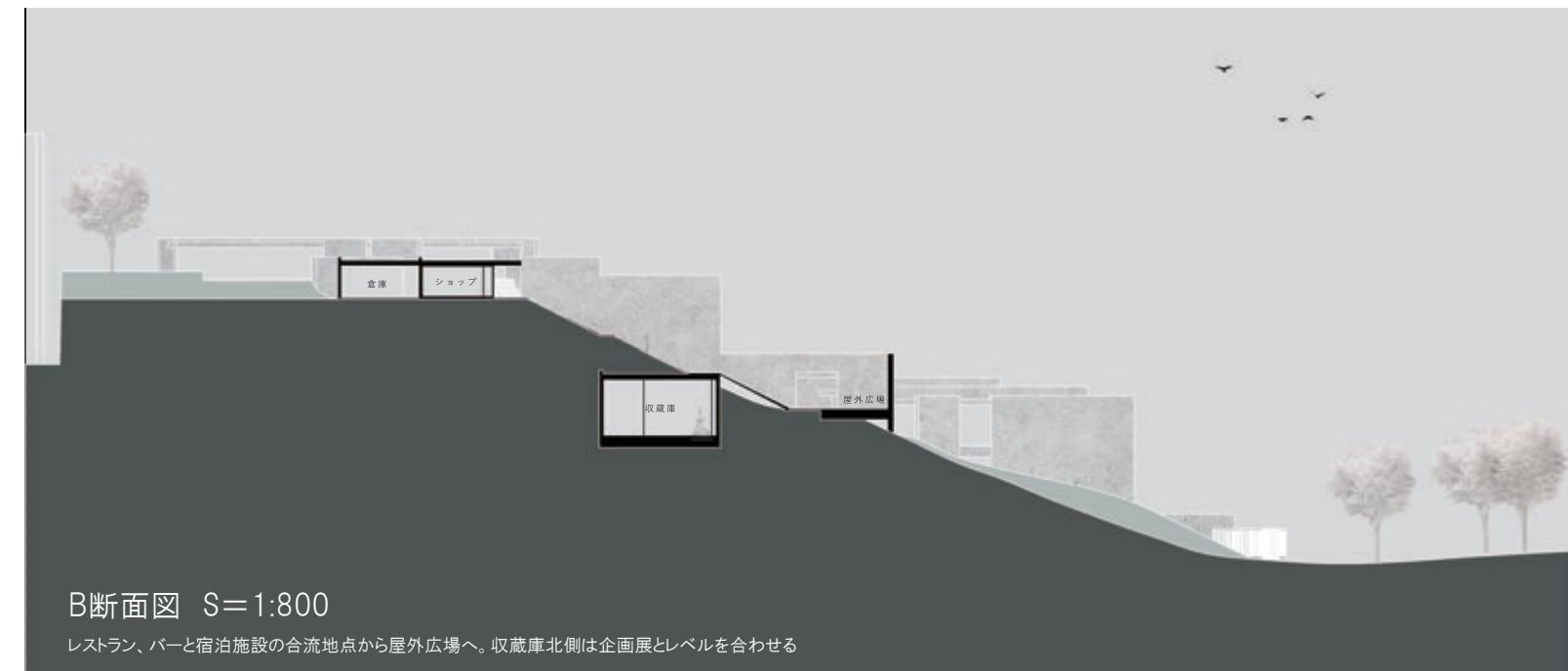
東立面図 S=1:800

展示室を通るメイン動線は南から北へ、斜面をときに避けながら、ときに下りながら展開する。



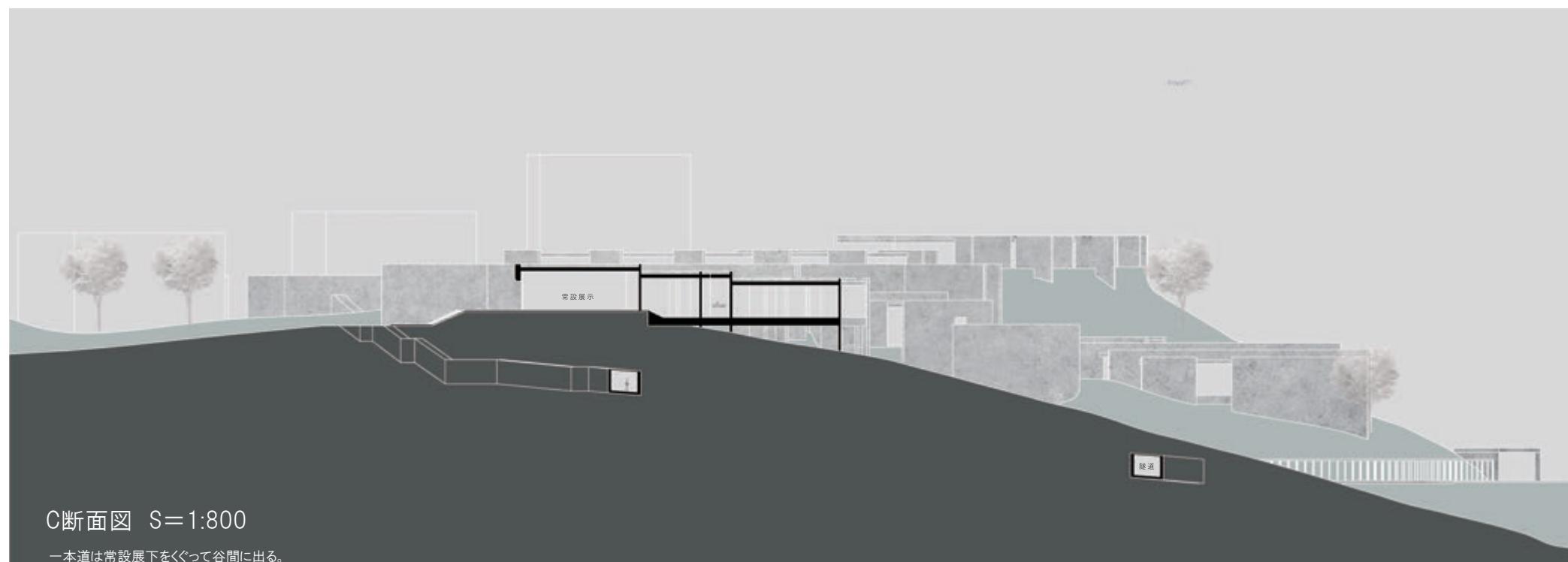
A断面図 S=1:800

企画展示から思索の場への動線。屋外に出てすぐに地下階段へ。



B断面図 S=1:800

レストラン、バーと宿泊施設の合流地点から屋外広場へ。収蔵庫北側は企画展とレベルを合わせる



C断面図 S=1:800

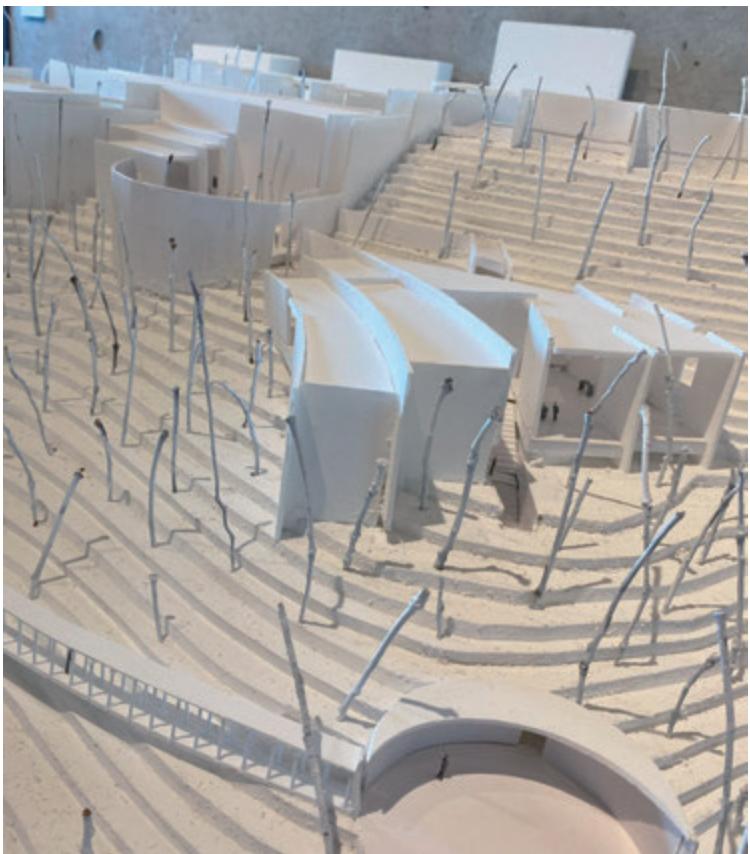
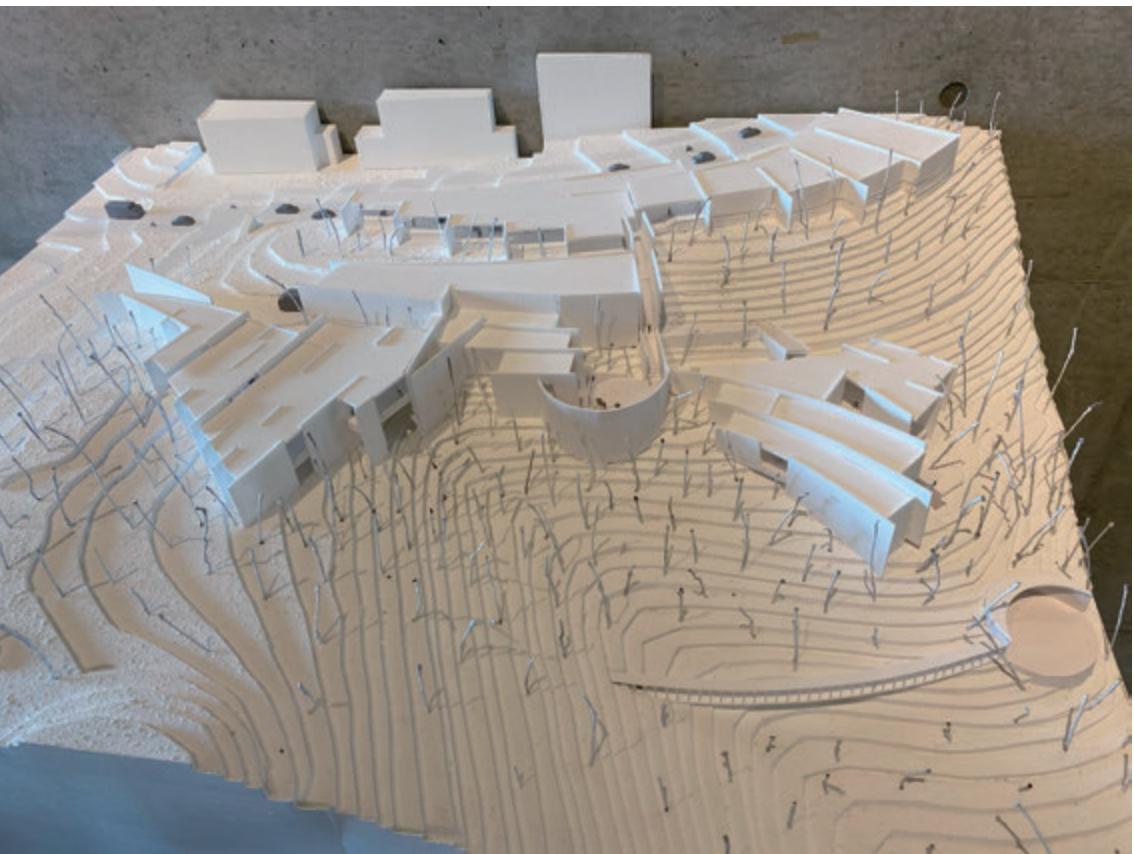
一本道は常設展下をくぐって谷間にいる。



思索の場を上からみる

常設展示から見る

学内講評会の展示風景



2024年都市アーキビスト会議(IoUA 2024)、最終カンファレンスの展示風景

